

かつて京都で暮らしていた時、よく川の源をさがす旅に出た。旅といってもその昔、喜撰法師が庵をむすんだという宇治山のあたりの道なき道を、枯葉を踏んでひたすら登っていくだけのことだ。やがて水滴がポタリ、ポタリと落ちるところに行きつく。これが宇治川の支流の白川の、そのまた支流の名もなき谷川の水源か、としばし感慨にふけり、急斜面を下りだしたとたん、一筋の流れが足元を流れている。さらに数メートルも降りるともう立派なせせらぎが作られているではないか。それは新鮮な驚きだった。川の流れを一筋の線ととらえている限り、わずかの距離でせせらぎが出現するはずがない。そのとき閃いた。水の流れは線ではなく面なのだ。伏流水がいたるところで浸み出し、そこに合流していることを忘れていたのだ。いやそればかりではないだろう。川には地下からの湧水、空からの降水も加わってくるだろう。そんなことを谷川のせせらぎが私に教えてくれた。

われわれは自己を絶対的なものと考えすぎてきたのではないだろうか。それは川を線ととらえる見方に似ている。他者という伏流なしには川も生成されることはないのだ。護岸工事を施された河川は、毛細血管を切断された生命体のようなもので、その生命力は衰えていく。魚が繁殖できなくなる前に川そのものが死に瀕していることを知るべきだろう。「表象のポリテクス——他者と自己」という特集のタイトルの意味を、自分なりに反芻しているとき、ふと思いついたのがこの川の「発見」だった。